

【登場人物】

- 二宮カリン(15)(6)……主人公
カリン母(46)……カリンの病弱な母親
カリン父(48)(39)……自死したカリンの父親
まり姉(17)……カリンの従姉
りか(14)……カリンの親友
カリンの叔母(52)
カリンの叔父(56)
カリンの祖母(67)
佐山……カリンの担任教師
女1……葬式に訪れた女性
女2……葬式に訪れた女性
男……葬式に訪れた男性
女子……カリンの同級生

【用語解説】

- M……モノローグ
SE……サウンドエフェクト(効果音)
E……エコー

#1

カリンM「私たちはずっと、長い長い夢の中にいる。それはあまりにも醜くて、脆くて、孤独な、夢」

#2

ガヤ 朝の教室

カリン 「ねえ、なんか匂いしない？」

りか 「匂い？ もしかして私臭い？」

カリン 「いや、そういうんじゃないよ……。あ、しなくなった」

カリンM 「その香りは、一瞬で教室の籠もった空気の中に溶けていってしまっ
ほど、微かなものだった。でも、あの日、それは確かに私の心を捕らえたのだ。

甘いようなしよっぱいような、それでいて何処か懐かしい、あの香り」

カリン 「なんだっけ、この香り。なんか、ずっと前に嗅いだことがあるような
……」

りか 「えー？ 気のせいじゃないの？」

カリン 「違うよ。ほんとに香ってきたんだって」

りか 「嘘だあ。あ、誰かのお弁当とかじゃない？」

カリン 「お弁当？ それならりかも感じるんじゃない？」

りか 「確かに……」

カリン 「なーんか引つかかるんだよね……」

SE (台詞を遮って)引き戸開く

佐山 「二宮、いるかー？ …… あ、二宮、なるべく急いで荷物片づけて。お
母さん、下にいらっしやってるから」

カリン 「えっ？」

3

ガヤ 大人たちが噂話をする声

SE 廊下走る

叔母 「ちよつと優！ 待ちなさい！」

カリンM 「通夜は、随分と賑わっていた。従弟が寺の中を走り回って叱られて
いるのを横目に、私は畳の目をひとつ、ふたつとなぞった」

カリン母E 「あのね、落ちて着いて聞いてほしいの。さっきお父さんが会社の屋
上から飛び降りて……」

カリンM 「父が、死んだ。母からそう告げられてから、まだ一日もたっていな
い。私は泣くことも笑うこともできず、私だけが、時間に追い抜かされていった」

女1 「信じられない……。あんなに明るい人がねえ」

女2 「カリンちゃんも奥さんも、お気の毒に……」

女1 「あんなに愛される人で、温かい家庭もあって……。何かあったのかしらね、人間関係、とか」

女2 「まあ、優しい人だもの。きつと悩むところがあったのでしよう」

女1 「そうね、ただでさえこんな世の中だから」

女2 「きつと、疲れてしまったのよ」

カリンM 「父は、よく笑う人だった。歯茎を見せて、顔をくしゃつと歪めて、太い眉を思いっきり下げて笑うのだ。父から死の匂いを感じたことは、一度もなかった」

SE 走る

まり 「カリン！」

カリン 「まり姉」

まり 「おじさん……」

カリン 「……」

まり 「……飛び降りたって、本当？」

カリン 「多分。でもまだ確定じゃないからさ、これから警察の人とかに色々聞いたり聞かれたりするかもしれないって、お母さんが」

まり 「そうなんだ」

カリン 「うん」

まり 「……」

カリン 「……」

まり 「なんか、落ち着いてるね」

カリン 「私、信じられないの、まだ。家に帰ったら、普通にソファにお父さんがいて、なーんだって笑って、一緒に夜ご飯食べて……。そういう未来を想像してる。お父さんがいない世界が、見えない」

まり 「しょうがないよ、こんなに突然のこと……」

カリン 「……」

まり 「カリン」

カリン 「……？」

まり 「気をしっかり持ってね」

カリン 「……うん。ありがとう」

4

S E 木魚やおりん

ガヤ すすり泣く声

男 「この度は本当に……」

カリン M 「たくさんの人が、父を惜しんで、涙を流していた。父は愛されていた。そう思うと、少しだけ救われるような気がした」

5

ガヤ 会食の席

叔父 「どうなんだ、再婚の方は！ え？」

カリン母 「まだ、そういうことは考えられないです（愛想笑いを含みながら）」

叔父 「まだ若いうちが華だぞ！ 売れ時を逃したら結婚なんてできないんだから！（がっはっはと笑う）」

叔母 「お父さん、飲みすぎよ」

カリン母 「ビールがいいですか？」

叔父 「ああ！ すまんな！」

叔母 「まったくもう……」

S E 飲み物を注ぐ

祖母 「ゆり子さん、あなた、カリンちゃんはこれからどうするつもりなの？ だからほら、進路のこととか……」

カリン母 「まだ、わかりません。でも、カリンには、苦勞をさせたくないんです。最悪、水商売でも何でも、お金が手に入るなら……」

祖母 「やめなさい、みつともない」

カリン母 「水商売はともかくとして、今の私の収入でカリンを大学まで行かせるのは、ほぼ不可能に近いです。転職も、私の体力的に難しそうで……」

祖母 「息子はあんなにまじめに働いてたのにねえ。いつまでも体が弱いとか言っただけで、少しは努力したらどうなの？」

カリン母 「すみません……」

祖母 「本当になんでこんな嫁をもらったのかしら。あなたの顔を見ると虫唾が走るのよ」

カリン母 「……」

カリン 「お母さんたち、何話してるんだろう」

まり 「さあ」

カリン 「あ、まり姉、この天ぷら食べなよ」

まり 「ありがとう！ え、カボチャ嫌いななの？」

カリン 「嫌いじゃないけど…… ちよつと、食欲なくて」

まり 「そっか」

カリンM 「会食は、味のひとつも感じられなかった。母は叔父や祖母と話している間ずっと、愛想笑いを浮かべていた。貼り付けたようなその笑顔はあまりにも痛々しく、母がこのまま心から笑うことを忘れてしまうのではないかと思うほどだった」

6

カリンM 「葬儀と告別式を終えて家に戻っても、やはりそこに父の姿はなかった。その夜は私も母も、父だけがないその家で、死んだように眠った」

7

S E 朝

カリン 「ん……」

カリン母 「あら、おはよう」

カリン 「ふぁーあ。おはよう……」

カリン母 「パン焼いたから、食べなさい」

カリン 「顔洗ってくる」

S E 水が洗面台に当たる音

カリン 「はぁ。よしっ」

S E 頬を叩く音

8

ガヤ 朝の教室(おはよう、など)

SE 鞆を漁る音

りか 「あ」

カリン 「おはよう、りか」

りか 「おはよう……。な、なんか、随分痩せたんじゃない？ やつれたっていうか……」

カリン 「そう？」

りか 「…… 大丈夫？」

カリン 「……」

女子 「(遮る)りかー！ あんた、今日日直でしょー？」

りか 「あ、忘れてた！ 今いく！ …… じゃあカリン、また後でね(気まずそうに)」

カリンM 「りか、私のお父さんね、死んじゃったの。私これから、病弱なお母さんと二人で、必死に生きていかなければならないの。これからのことも、何にもわからない。私、これからどうやっていけばいいの？ …… 言いたいことが山ほどある。でも、りかに吐き出したところで、どうにもならない。お父さんだって、あんなに愛されていたはずなのに、自ら死を選んだのだ。人は結局、孤独で、寂しくて……。誰も生き方なんて、決めてくれない」

9

カリンM 「帰る途中の電車の中で、夢を見た。結婚式の夢だった。私は、ウエディングドレスに身を包み、笑っていた。客席には、母、りか、祖母、祖父、叔父、叔母、まり姉、そして、父。そして、既に私のお腹は、私のお腹は、いまよりずっと大きく膨らんでいた」

カリン父E 「カリン。おめでとう」

カリンE 「ありがとう、お父さん」

カリン父E 「カリンももうすぐお母さんか。カリンの孫の姿を見るまでは、俺、死ねないなあ……」

カリン母E 「何言ってるのよ。あなたはきつと、ひ孫が生まれるときまでしばらく生きてるわ(稲やかに笑いながら)」
カリン父E 「ははっ。それもそうだな」
カリンE 「…… お父さん」
カリン父E 「ん？」
カリンE 「長生き、しなよ」
カリン父E 「ありがとう、カリン——」

10

SE 鍵開ける

SE ドア開ける

カリン 「ただいまー……」
カリン母 「あら、おかえり」
カリン 「お母さん……。調子、悪いの？」
カリン母 「会社行こうと思ったんだけど、電車の中で具合悪くなっちゃって。……ちよつと、疲れちゃったみたい」
カリン 「そっか」
カリン母 「学校はどうだった？」
カリン 「楽しかったよ。体育もあったし」
カリン母 「それならよかった。何か、言われたりしてない？」
カリン 「大丈夫だよ。みんなそんなに気にしてないみたいだったし」
カリン母 「そう……。手、洗ってきなさい。昨日もらったお菓子あるから」
カリン 「わかった」

SE フォークが皿に当たる音

カリン 「あ、おいしいね、これ」
カリン母 「そうね。これ、大倉さんがくれたのよ。覚えている？ カリンが小さいとき、よくうちにきてお父さんと呑んでいた」
カリン 「ああ！ あのよね」
カリン母 「お通夜のとき、随分泣いていたの。お父さん、会社で大切にしてもらっていたのねえ。なんだか安心したわ」

カリン 「お葬式の時、結構会社の人も来ていたの？」
カリン母 「ええ。昔からの同僚の方も何人もいらっしやっていたわ」
カリン 「そうなのだ……。お父さん、本当に愛される人だったのだね」
カリン母 「そうね。優しい人だったもの。優しくて、強い人だと思っていた。
何にも、わかってあげられてなかったのね」
カリン 「……」

#11

S E 朝

カリン 「お母さん」
カリン母 「ん？」
カリン 「お小遣いください」
カリン母 「いいけど、どうして？」
カリン 「料理でも、勉強しようかと思って。少しでもお母さんの役に立ちたいから」
カリン母 「あなたはあの人に似て、優しい子ね」

S E 硬貨

カリン母 「はい。大切に使いなさい」
カリン 「ありがとう」

#12

ガヤ 商店街

S E 歩く

カリン 「どこだっけ。確か赤い看板の……。あ、あれだ！」

S E 走る

13

SE 本屋のBGM

カリン 「レシピ、レシピ。この辺かな」

SE 本棚から本を抜き取る

カリン 「スイーツ、違うな。お弁当、違う。今日から自炊を始めるあなたに……。よし、これにしよう」

14

SE 電気つける

カリン 「ただいまー……。まだ帰ってきてない、か」

SE 紙

カリン 「何これ？」

カリン母M 「かりんへ。レシピ本は買えましたか？ 料理は今度お母さんが忙しくない日に、一緒に練習しましょう。冷蔵庫に、お母さんが作ったおかずがあるから食べてね。あと、お父さんの日記を見つけました。無理して読まなくてもいいからね。お母さんより」

カリン 「日記……」

15

カリンM 「日記は、長く使っていた割には随分と綺麗だった」

SE 紙めくる

カリン父E 「とくに特別な日というわけでもないが、日記を買ってみた。メモ

程度にゆっくりと」

カリン父E 「今日はカリンの五歳の誕生日。ずっとほしがっていた熊のぬいぐるみをあげた。随分喜んでいたので、ボーナスを使ったかいがあった」

カリン父E 「ゆり子とカリンと三人で、遊園地に行った。途中でゆり子がダウンして、カリンが心配そうにしていた。人が多いところはやはりだめか。反省反省」

カリン父E 「カリンが保育園のお泊り会で家にいないので、ゆり子とちよつと贅沢してレストランに行った。チーズの Pasta が美味しかった。また行こう」

S E ノートを閉じる

カリンM 「それはあまりにも幸せな日記だった。そこには、自らの死を願うようなことも、他人への攻撃も、何一つとして書いていなかった」

カリン 「あれ、何か貼ってある。何だろう」

S E 紙めくる

カリン 「何これ、焼きそばの作り方？ 焼きそば……。はっ」

カリン父E 「カリン！ 今日はお父さんと一緒に料理するぞ！」

カリン幼E 「りょうりー？」

カリン父E 「キャベツあるし、焼きそばにするか」

カリン幼E 「わーい！ 焼きそば焼きそば！」

カリン 「決めた。作ろう、焼きそば」

16

S E 野菜を洗う

カリン 「このキャベツ、大きいな」

カリンM 「まず、キャベツから。ざっと食べやすい大きさにする」

S E キャベツ切る

カリン父E 「こだわらない、こだわらない。あ、手は切るなよー。そうそう。いい感じ」

カリンM 「蘇ってくる。幼い私の腕を支える父の姿。いつも優しく私を導いてくれた、いつだって信じさせてくれた、あの人の逞しい姿」

SE キャベツを切る

カリンM 「ザク、ザク、ザク、ザク。細かく切れたら、ボウルに移し替える。ソースは、慎重に調べていく。まずレシピ通りの比率で混ぜたら、足りない部分を少しずつ補う。足したり、引いたり」

カリン 「ん。もうちょつと醤油足すか」

SE 醤油注ぐ

カリン父E 「カリン、お父さんソース作るから、向こう行って。え？ カリンにはまだ難しいよ(笑いながら)」

カリンM 「あの頃は、退屈が何よりの幸せだった。その時は、何をして待っていたのだろう。たしか、クレヨンを使って動物やキャラクターのイラストを描きながら、父をせかしていたような気がする」

SE コンロをつける

カリンM 「次は、サラダ油をフライパンにしいて、柔らかくなるまでキャベツを炒める。香ばしい香りがしてきたら、麺と、さっき作ったソースを流し込んで、馴染ませる」

SE ジュワーツとソースが熱せられ跳ねる音

カリン父E 「おい、ソース飛ばすなよー。どわっ！ 焦げてる焦げてる！」

カリンM 「まだ幼かった私は集中力がなく、糖度の高いソースはあつという間に焦げてしまった。父は何やってるんだよと言いながらも、笑って許してくれた」

SE コンロを止める

SE ソースが小さくパチパチ鳴る

カリンM 「麺に少し焦げ目がついたら、火を止めて皿に盛り付ける。仕上げに青のりと紅しょうがを添えて……」

SE ドア開ける

カリン母 「あら、いい匂いがすると思ったら……」

カリン 「お母さん、一緒に食べよう」

#17

カリン母 「焼きそばか……。懐かしいわね。カリン、覚えてる？ あなたがずいぶんちっちゃいときに、お父さんと一緒に作ったでしょ」

カリン 「覚えてるよ」

カリン母 「そうそう、あなたがソースこぼしたり、麵焦がしたりで散々でね(笑)いながら)。でもまあ、よく立派に育ってくれたわ。あんなちんちくりんだったのにねえ」

カリン 「ふふっ」

カリン母 「あ、長話してごめんなさいね。温かいうちに食べましょう」

カリン 「せーの」

二人 「いただきます」

SE 食器

二人 「んっ。……おいしい！」

カリン 「ソースのおかげかな。すごく味に深みがあって、おいしい……」

カリン母 「ねえ、このソース……」

カリン 「えっ？」

カリン母 「このソースって、お父さんの……？」

カリン 「え？ そうだけど……。よく覚えてるね」

カリン母 「忘れるわけないわ。だって、何度も食べたもの。この焼きそば」

カリン 「えっ？」

カリン母 「誕生日の度に、毎年作ってもらってたの。これぐらいしか作れないけどって」

カリン 「そうなんだ……」

カリン母 「それで、ある時急に、次の誕生日は究極に美味しい焼きそばを作る！ って言い出して……。あ、まだカリンが生まれてなかった頃ね。それから毎日毎日研究してたわ。それがあまりに健気で、面白くって（笑いながら）。このソースは、その時にできたのよ。それにしても、どうやってこの作り方を……？」

カリン 「お父さんの日記に、挟まってたの。手書きのレシピ」

カリン母 「レシピなんて書いてたのね。ほら、お父さんああ見えて、意外とずぼらだから。でも、よかったわ。あの焼きそばがまた食べられるなんてね」

カリン 「あっ」

カリン母 「ん？」

カリン 「ねえ、お父さん亡くなった日に、匂い、しなかった？」

甘くて、しょっぱくて……。それこそ、ソースみたいなの

カリン母 「匂い……。？ したかなあ……。 (しばらく考え込む) …… あっ！

したわ。あまりにも一瞬のことだったから、勘違いじゃないかと思ってたけど」
カリン 「私も、感じたの。ソースの香り。本当に一瞬だった。……。幽霊なんて信じてないけど、あれは、虫の知らせだったんじゃないかって思ってる。お父さんが、私達に、何か遺そうとしたんじゃないかって」

カリン母 「……」

カリン 「…… 許せない」

カリン母 「え？」

カリン 「許せない、お父さんのこと。もしそうだとしても、あの人は、結局、何も遺してくれなかった！ 勝手に死んで、勝手に家族も、友達も、仕事仲間も、捨てたのよ！」

カリン母 「やめなさい！」

カリン 「あんなに身勝手な人間が、あんなに愛されて……。それで最期は自殺？ ふざけないでよ！」

カリン母 「カリン！」

カリン 「お父さんが遺してくれた物なんて……。小さな幸せのつまった思い出と、あのひまわりみたいな笑顔だけ……。うっ……。 (激しく泣きながら) どうして死んじゃったんだよ……。！ 確かに生きてたんだよ、お父さん。この焼きそば食べて、一緒に美味しいって言って。だけど、死んじゃった……。灰になって、どこか遠いところに行っちゃった……。！ 私、これからも生き続けなければいけないの。お父さんだけがいないこの家で、お母さんと二人だけで……。！」

カリン母 「カリン……」

カリン 「うわあああああん！ お父さあああああん！」

カリンM 「私は、父が死んで、初めて泣いた。そして、生まれて初めて、父を

呪った。死を選んだ父を、呪った。父に死を選ばせた何かを、呪った。食べかけの冷めた焼きそばは、私たちに同情さえ向けなかった」

18

カリンM 「私たちはずっと、長い長い夢の中にいる。それはあまりにも醜くて、脆くて、孤独で、美しい、夢」